

支部だより

東北支部だより

当支部では初代支部長間野浩氏が転任（昭和32，11，16）された後，その後任決定にあたり規約上の不備があって欠員の俣となっていたが，その後規約を改正し欠員理事を選挙，岡田群司氏（現仙台管区気象台長）が互選された。

又当支部の気象学会は33，10，3秋田市で開催され，引続いて33，10，22～24日本部主催秋季大会が仙台で開催された。当支部では現地における世話一切を引受け，大会は盛大且つ滞りなく終了した。

以上で，本年度における当支部の主要行事はほとんど全部終了したので報告します。なお規約の改正，選挙結果，役員，会員数，支部気象学会開催状況等は下記のとおりです。

◎ 日本気象学会東北支部の規約（本誌Vol. 4 No. 8. p. 266）はつぎのとおり改正された（昭和33，7，5付東北気第11号）。

1. 第8条及び条11条を次のように改める。

○第8条 本支部に次の役員を置く

理事6ないし8名（内支部長1名，常任理事2ないし4名）

○第11条 支部長はこの支部を代表して会務を総理する。支部長に事故あるとき，又は欠けたときは支部長があらかじめ指名した常任理事がその職務を代行する。

2. 条14条のあとに次の各条項を加える。

○第15条 支部長は毎年1回及び必要に応じて理事会を招集する。

○第16条 理事会は過半数の理事が出席しなければ成立しない。

○第17条 支部長は次の事項を理事会の承認を得て会員に報告しなければならない。

1. 事業計画及び収支決算
2. その他，理事会において必要と認められた事項。

○第18条 本支部の経費は支部交付金，寄付金及び入会あっせん手数料とす。

○第19条 この規約は理事の3分の2以上の賛成を得なければ変更することが出来ない。

○付則を第20条とする。

◎ 日本気象学会東北支部細則（昭和33，7，5付東北気第11号）

役員選挙

1. 理事は東北地区在住の会員中より6～8名を選出する。このうち在仙理事3～5名，地方理事3名とする。
2. 次期理事の定数及び在仙，地方別理事数は理事会で決定する。
3. 候補者は理事会の推せん者及び立候補者とし，投票締切日の20日前までに決定の上会員に周知するものとする。
4. 立候補者は投票締切日の30日前までに支部長宛届出るものとする。
5. 投票は無記名連記とす，たゞし連記数は第2項の決定による，在仙，地方別理事数とす。
6. 投票は文書投票とす。
7. 有効投票により，各地区別に得票の多い順に次期理事を決定する。同数の場合は年少者を上位とす。
8. 当選者が理事就任を辞退した場合は次点者を繰上げる。
9. 理事に欠員を生じた場合の補充は次点者をあてる。
10. 開票は常任理事立会のもとに行う。
11. 開票結果は会員に報告する。
12. 理事に欠員を生じ補充が出来ない場合は補欠選挙を行う。
13. 補欠選挙は細則1～11項を準用する。
14. 補欠選挙による補充理事の任期は前理事の残存期間とす。

◎ 日本気象学会東北支部在仙理事の補欠選挙結果

開票日時 昭和33，8，15，15h

開票場所 仙台管区気象台調査課

開票立会者 高橋常任理事，難波，大西幹事，外会員2名

投票総数 103票（内無効1）

開票結果 岡田群司氏95票（当選）次点内海徳太郎氏2票

◎ 日本気象学会東北支部役員（昭和33，9，11現在）前記選挙により欠員理事が決ったので理事互選によ

り岡田群司氏が支部長となった。従って昭和33, 9, 11現在の東北支部役員につきのとおりととなった。

支部長……………岡田 群司
 常任理事……………内海徳太郎
 // (事務) ……高橋 正吾
 理事(会計監査) ……山本 義一
 理事……………大内 浩
 // ……………山本 正巳
 // ……………伊藤 亀雄
 幹事……………難波 信吉
 // ……………大西 外史

なお同日現在の支部会員数は 152名である。

◎ 東北支部気象学会開催状況

日時 昭33, 10, 3 09~16時

場所 研究発表…秋田地方气象台 (09~12時)

見 学…秋田電波観測所 (13~16時)

◎ 研究発表

- 1 青森県の風の子報について……………百足虎治 (青気)
- 2 中緯度環流機構の一環としての大陸間跳躍現象
 について……………小林一雄 (秋気)
- 3 北日本を横切る際に分裂する低気圧について
 (本邦付近の副低気圧について)
 ……酒井 一 (秋気)
- 4 降雨時における秋田県内上昇気流の分布につい
 て……………加藤甲子郎(秋気)
- 5 防潮林伐採前後における周辺稲田上の風速分布
 の変化について……………高橋正吾 (仙気)
- 6 北上川をモデルとした寒冷前線による雨量予報
 ……山下 洋 (仙気)
 ……角野迪夫 (仙気)
- 7 海水の泡沫による有線障害について
 ……箱田顕雄 (秋気)
- 8 雨滴の粒形分布について……………大内 浩 (秋大)

以上

(天気編集東北地区委員 高橋記)

北海道支部第2回講演会開催

去る11月8日午後1時半から、北大理学部第205号講堂において、北大低温科学研究所談話会、物理学会道支部および当支部共催で、北大の中谷宇吉郎教授(当支部長)をお迎えして講演会を開催した。

開会前から300名を入れる大講堂も超満員、延々4時

間になんなんとする講演に、終始しわぶき1つなく、200枚に及ぶゴダクロームの精彩な画面と、例によってユーモアと警句を混えた明解な解説に時の経つのを忘れた有様であった。

午後5時過ぎ一たん講演を終り、中谷教授を囲んで質問説明と有意義な講演会はいつ果てるとも知れない盛会であった。

講演は昨年に引き続いて行われた、グリーンランドの氷冠の研究(第二報)に始まり、欧州紀行を混えて最後はシャモニー(スイス)で開催された国際雪氷委員会の氷河シンポジウムの報告であった。

『グリーンランドにおける氷冠の研究については、昨年行った研究は深さ1600呎までの氷冠のいろいろな物理的性質の究明であったが、本年は作業の都合でボーリングをやめて、来年度一気に深さ7000呎までのサンプルを採り、その性質を徹底的に究明することとした。それで本年は粉雪を固めるための基礎研究を主にしたが、この研究にも昨年までの研究成果が大いに役立ったとのことで、比重0.3位の新雪を速い速度で吹き飛ばして堆積させると0.5~0.6位の比重になり、自然沈降の状況を人工的に早めることが可能であることが判った。』積雪を固める問題は寒冷地における除雪、建築、交通、航空上等で重要な問題で、邪魔者扱いにしていた雪、寒冷地の発展を阻害している雪も、そのものがあるがまゝの姿を素直に利用して行けば、また非常に有用なものであるらしい印象を受けた。北緯78度の北極圏の雪と氷の中に東京都以上の文化雪下衝が出現している様子などは、単に物量にもの言わせたものではなく、雪と氷の基礎的な性質を巧みに利用した成果であると思われ、真に興味ある話であった。

また美しいスイスの山々の写真を前に、われわれ日本に住む者にとってはおよそ縁の薄い氷河の話。それがチグリス、ユフラテス、メソポタミア文明の、或いは東洋の黄河文化の昔から利用されて来た水資源が、近年に至って世界的に資源不足となり、年代と共に河をさかのぼって、悠々たる氷河が水資源の対象としてクローズアップして来ていることにつながると説き起し、フランス、スイスは勿論のこと、最近ではアルゼンチン、メキシコ(国内に氷河があるのだそうです)等でも積極的に国として氷河の研究に乗り出して来たこと。

そしてこの巨大な氷河の究明にもまた札幌、グリーンランド等であって来た雪と氷の基礎的な極微の研究が繋がっていること、等々、世界的な低温ブームと話はそれからそれへと続いていった。(以上)

※天気# 5.12.